

マレー人日本語学習者の作文にみられた漢字の書き誤り

佐々木 良 造*

キーワード：漢字の書き誤り，非漢字，部品，異なる部品の使用，1画多いまたは少ない

要 旨

本研究は、非漢字圏日本語学習者の作文にみられた漢字の書き誤りを収集し、Hatta et al (1997)に従い、分類を試みたものである。分類の結果、Hatta et al (1997, 1998)、大北(2001)と同様、「非漢字で代用」の書き誤りが最も多かった。「非漢字」の書き誤りの要因で最も多かったのは「異なる部品の使用」による書き誤りであった。これは、本調査の対象となった学習者が「非漢字圏日本語学習者は覚えやすい部分を切り取り、他の形を継ぎ足す」(伊藤2006)という漢字の記憶方略をとっていることを示唆する結果である。つまり、学習者が書き誤りやすい部分とは「継ぎ足し」の部分であり「継ぎ足し」となる小部品に注意を促す指導の必要性が示された。そして、「非漢字」の書き誤りの要因で次に多かったのは「1画多いまたは少ない」であった。特に、横線が1画少ない書き誤りが多く見られた。

よく言われる「細かいところが間違えやすい」の「細かいところ」とは、具体的には「継ぎ足された部品」あるいは「1画多いまたは少ない」という2つの点であることがわかった。

一方、書き誤りの要因で少なかったのは「部品の配置の誤り」および「部品の付加または脱落」であった。書き誤りの少ない要因と多い要因を比較すると、前者は漢字の全体的な形の把握に関わる書き誤りであり、後者は漢字の細部の書き誤りであると言えよう。「漢字の学習過程は全体的構造から部品の細部へと習得が進む」と言われている(大北2001)ことから、調査の対象となった学習者は「部品の細部への習得」が進んでいるところであることをうかがわせる。

1. 研究の目的

日本語学習における漢字の学習は、非漢字圏の日本語学習にとって大きな負担になるといわれている。非漢字圏日本語学習者のための漢字学習教材の検討が盛んに進められているが、未だ漢字学習の負担を減らす有益な方法の結論は出ていない。一方、学習者の目的によっては、漢字は読めればよく、書けなくてもよい場合もあり、漢字を書く必要性はないという意見もある。しか

*SASAKI Ryozo：マラヤ大学予備教育部日本留学特別コース日本語科常勤講師

し、特に予備教育を目的とした日本語教育において、学習者が大学一年次に入学してからのことを考えると、生活の上では無論のこと、試験やレポートなど大学教育を受ける上で日本語を書くことは避けては通れない。

このように学習者は漢字を書く必要に迫られてはいるものの、やはり漢字の書き誤りが多い。漢字の書き誤りは、前後の文脈から書き手の書こうとした漢字が推測できることも多い。したがって、コミュニケーションに支障はきたさないと考えられがちだが、読み手に負担を与えるだけでなく、話すときと異なり、書き手と読み手が同時に同じ場にいることは少ないため、読み手は書き手に意図の確認や理解が十分できないところの説明を求めることができない。もし、書き手が漢字を書き誤った場合に、読み手が文脈から適当な漢字の推測ができなかったとしたら、コミュニケーションに支障をきたす恐れも考えられるだろう。つまり、日本語を書く必要がある学習者に対し、正確に書くことを指導するのは重要だと考えられる。

そこで、本研究は非漢字圏の日本語学習者の漢字の書き誤りのデータを収集・分類することによって、どのような書き誤りの特徴があるかを探り、指導上の留意点を提示することを目的とする。

2. 先行研究

非漢字圏日本語学習者の書き誤りを分類した先行研究に Hatta et al (1997, 1998)、大北 (2001) がある。

Hatta et al (1997) では、日本語を母語とする大学生 2,200 名 (以下, NS) と、大学で日本語を学ぶアメリカ人学習者 26 名 (レベル不明) (以下, AmS) の漢字の書き誤りを比較し、Hatta et al (1998) では、Hatta et al (1997) の NS と、大学で日本語を学ぶ初級レベルのオーストラリア人学習者 26 名 (以下, AuS) の漢字の書き誤りを比較している。以下に Hatta et al (1997) の分類を示す (日本語訳は筆者)。

分類(1)は同訓異字、または同音異字による書き誤りである。分類(2)は形の似ている漢字の混同である。全体的な形は似ているものの、本来とは異なる漢字の部品が使われているため、異なる漢字となってしまっている。分類(3)は意味が似ている漢字の混同である。分類(4)から分類(7)までは、分類(1)から分類(3)のうちの2つあるいは3つの要素を持つ書き誤りである。分類(8)は、書き誤った結果、存在しない、あるいは使われない漢字の形となった「非漢字」である。分類(9)は、二字熟語の順番が逆になったものである。表1に、分類(1)から分類(10)の例を示す (日本語訳と例は筆者による。原文は参考資料1を参照)。

Hatta et al (1997) は、分類(8)「非漢字」をさらに5つのカテゴリーに分類した (日本語訳は筆者)。表2に下位分類(a)から(e)の例を示す (日本語訳と例は筆者による。原文は参考資料2

表1 書き誤りの分類と例

分類	例
(1) 音が似ている漢字で代用	大事にして着た (来た) / 解結 (解決)
(2) 形が似ている漢字で代用	因る (困る) / 生治 (生活)
(3) 意味が似ている漢字で代用	頭が明い (良い) / 教業 (授業)
(4) 音と形が似ている漢字で代用	新切 (親切) / 持間 (時間)
(5) 音と意味が似ている漢字で代用	熱い (暑い)
(6) 形と意味が似ている漢字で代用	小し (少し) / 体量 (体重)
(7) 音と形と意味が似ている漢字で代用	少学校 (小学校)
(8) 非漢字で代用	家族 (家族) / 以前 (以前)
(9) 二字熟語の順番の誤り	手上 (上手) / 日今 (今日)
(10) その他	弱徴 (特徴) / 言本語 (日本語)

表2 分類(8)の下位分類と例

下位分類	例
(a) 1画あるいは2画多いまたは少ない	漢(漢) 題(題)
(b) 異なる部品の使用	授(授) 質(質)
(c) 部品の配置の誤り	吠(知) 脾(朝)
(d) 部品の付加または脱落	茨(英) 管(管)
(e) (a)から(d)の二つ以上の組み合わせ	熱(熱) 兌(況)

を参照)。

AmSとAuSの特徴として、「(a)1画あるいは2画多いまたは少ない」ことに起因する書き誤りと「(b)異なる部品の使用」に起因する書き誤りが多いことがわかっている。

大北(2001)は、初級から中級にかけての、漢字圏(中国46名・韓国78名・シンガポール18名)、非漢字圏(ベトナム33名・タイ48名・マレーシア102名・インド63名)の日本語学習者の作文から漢字の書き誤りを収集し、Hatta et al(1997)とは別の独自の分類を用いて、漢字の書き誤りの分析を行っている(参考資料3,4参照)。

大北(2001)の分類は、書き誤りが漢字か非漢字かで分けていないので、Hatta et al(1997,1998)と一概に比較することはできないが、非漢字圏日本語学習者の漢字の書き誤りの傾向として、音・意味より形に関する書き誤りが多いこと、また、「1画あるいは2画多いまたは少ない」に起因する書き誤りが多いことが共通している点である。

Hatta et al(1997,1998)、大北(2001)の3つの先行研究から、アメリカ・オーストラリア・

ベトナム・タイ・マレーシア・インドの非漢字圏日本語学習者の漢字の書き誤りの傾向として、以下の3点がわかった。

1. 「非漢字」の書き誤りが多い。
2. 「1画あるいは2画多いまたは少ない」ことに起因する書き誤りが多い。
3. 「異なる部品の使用」に起因する書き誤りが多い。

3. 調査の対象と方法

調査対象者は、日本の理工系大学に3年次編入するためのプログラム¹で理工系科目と日本語を平行して学習している18才から20才の学生で、母語はマレー語である。

調査時期は2006年4月から6月で、日本語の授業で学習者が書いた作文から漢字の書き誤りを収集した。約600字の作文を75名がそれぞれ5回ずつ書いた。

2006年6月までに学習者は約700時間日本語を学習しており、約8割が前年度の日本語能力試験3級に合格している。漢字学習については、約700字が学習済みであった。漢字のテキストは、初級は「ひらけ日本語」(拓殖大学)に付属する「ひらけ日本語文型練習帳・漢字学習帳(上・下)」の「漢字練習帳」が使用され、初級以降は“*Kanji in context reference book*” (The Japan Times) が使用されている。

漢字の書き誤りは以下のように数えた。

1. ある学習者の1回の作文のうち、同じ漢字を同じ書き方で書き誤った場合は、2回以上書き誤っていても1つと数えた。
2. ある学習者の1回の作文のうち、同じ漢字を2通りの書き方で書き誤った場合は、2つの書き誤りと数えた。
3. 学習者は1人5回作文を書いている。ある学習者がある回の作文と別の回の作文で、同じ漢字を同じ書き方で書き誤った場合、2つの書き誤りとした。

4. データの分類と分析

学生が書いた作文の中から、漢字の書き誤りが815例収集された。本調査のマレー人日本語学習者(以下、M'sia)の書き誤りの分類を、表3に示す²。

分析の結果、分類(8)「非漢字」の書き誤りが最も多かった。これは、Hatta et al (1997,

¹ このプログラムはJAD (Japanese Associate Degree) と呼ばれ、マレーシアで予備教育を1年、大学教育を2年受けたあと、日本の大学の工学部(電気・電子系または機械系)の学部3年次に編入することを目的としたプログラムである (<https://office.shibaura-it.ac.jp/kokusai/jucte/program/outline.html> 参照)。

² 百分率は小数点以下第二位を四捨五入したため、総計が100にならない。

表3 本調査の結果

分類	データ数	%
(1) 音が似ている漢字で代用	25	(3.1%)
(2) 形が似ている漢字で代用	145	(17.8%)
(3) 意味が似ている漢字で代用	2	(0.2%)
(4) 音と形が似ている漢字で代用	21	(2.6%)
(5) 音と意味が似ている漢字で代用	1	(0.1%)
(6) 形と意味が似ている漢字で代用	11	(1.3%)
(7) 音と形と意味が似ている漢字で代用	1	(0.1%)
(8) 非漢字で代用	593	(72.8%)
(9) 二字熟語の順番の誤り	17	(2.1%)
(10) その他	3	(0.4%)
計	815	(100%)

1998), 大北 (2001) と同様の傾向である。

以下, 書き誤りに関わっている要素が「非漢字」の分類(8)に焦点を絞り, 分析を進めていく。分析は, 同じく Hatta et al(1997)の分類(8)の下位分類に従い, 書き誤りの数を調査する。また, 下位分類の特徴をとらえるために, さらに細かく分類して分析を行う。

4-1. 「分類(8)非漢字」の分析

Hatta et al (1997) の分類(8)の下位分類に従って本調査で得られたデータを分類したところ, 表4のようになった³。しかし, 自(自)や, 便(便)のような, 下位分類(a)から(e)のどれにもあてはまらないものが出たため, 「(f)その他」という分類を立てた。

分類(8)の下位分類のなかで最も多かったのは, (b)「異なる部品の使用」で214例(36.1%)であった。次に多かったのは, (a)「1画あるいは2画多いまたは少ない」の156例(26.3%), そして(e)「(a)から(d)の二つ以上の組み合わせ」の51例(8.6%), (d)「部品の付加または脱

表4 分類(8)の下位分類

下位分類	データ数	%
(a) 1画あるいは2画多いまたは少ない	156	(26.3%)
(b) 異なる部品の使用	214	(36.1%)
(c) 部品の配置の誤り	6	(0.8%)
(d) 部品の付加または脱落	47	(7.9%)
(e) (a)から(d)の二つ以上の組み合わせ	51	(8.6%)
(f) その他	119	(20.1%)
計	593	(100%)

³ 百分率は, 分類(8)の書き誤りの総数を100としたものである。また, 百分率は小数点以下第二位を四捨五入したため, 総計が100にならない。

落」の47例(7.9%)、(c)「部品の配置の誤り」の6例(0.8%)の順であった。(f)「その他」は119例(20.1%)であった。本調査の結果と Hatta et al (1997, 1998) から、共通点として(a)「1画あるいは2画多いまたは少ない」ことに起因する書き誤りの割合が高いこと、および(b)「異なる部品の使用」に起因する書き誤りの割合が高いことがわかった。

4-1-1. 「(a) 1画あるいは2画多いまたは少ない」書き誤りについて

分類(8)の(a)に含まれる書き誤りは「1画多い」「2画多い」「1画少ない」「2画少ない」のいずれかである。しかし、収集されたデータの中には「2画多い」あるいは「2画少ない」という書き誤りはなかった。以下、本稿では「1画多いまたは少ない」書き誤りと記す。

「1画多いまたは少ない」書き誤りは、漢字のどの部分が多いか少ないかを調べてみると、点、縦線、横線、斜線、短斜線のいずれかが多いか少ないことがわかった。表5に例を示し、表6にその数を示す。

表6から、横線が1画少ない書き誤りがもっとも多く、点が1画少ない書き誤り、続いて横線が1画多い書き誤りが多いことがわかる。また、横線が1画多い、あるいは少ない書き誤りがほぼ半数を占め、点が多い、あるいは少ない書き誤りが約3分の1を占めている。

横線が1画少ない書き誤りの例として、「受(受)」、「授(授)」、「将(将)」、「係(係)」、「懸(懸)」が挙げられる。また、「影(影)」、「音(音)」、「簡(簡)」、「願(願)」、「者(者)」、「練(練)」のように、「日」の中の横線が1画足りないものや、「覚(覚)」、「顔(顔)」、「質(質)」、「息(息)」、「題(題)」、「費(費)」のように「目」の中の2本の横線が1本少ない書き誤りがみられた。

表5 分類(8)の下位分類(a)の例

	点	縦線	横線	斜線	短斜線
1画多い	願(願)	濯(濯)	甘(甘)	物(物)	住(住)
1画少ない	点(点)	左(在)	同(同)	弟(弟)	強(強)

表6 分類(8)の下位分類(a)のデータ数

	点	縦線	横線	斜線	短斜線	計
1画多い	14	1	26	8	3	52
1画少ない	29	10	49	11	6	109
計	43	11	75	19	9	156

表7 分類(8)の下位分類(b)「異なる部品の使用」のデータ数と例

右	数	例	下	数	例	左	数	例
■	19	歌(歌)	■	29	感(感)	■	34	強(強)
■	20	様(様)	■	8	賞(賞)	■	5	離(離)
■	10	漢(漢)	■	4	歳(歳)	■	1	教(教)
他	12		他	7				
計	61	(10種)	計	48	(6種)	計	40	(3種)

上	数	例	内	数	例	外	数	例
■	29	悪(悪)	■	6	康(康)	■	1	療(療)
■	3	変(変)	■	5	通(通)	■	1	風(風)
■	2	響(響)	■	4	達(達)	■	1	起(起)
他	5		他	6				
計	39	(7種)	計	23	(7種)	計	3	(3種)

4-1-2. 「(b) 異なる部品の使用」による書き誤りについて

漢字のある部品が異なるため、非漢字となった書き誤りは214例あった。以下、異なる部品を使用している部分を黒く塗りつぶした正方形を用いて、どの部分に異なる部品が使われているのかを模式的にあらわす。たとえば、■は、左右に分解できる漢字の右下の部分の部品が、正しい漢字と異なっていることを示す。表7に、位置ごとに主な書き誤りのデータ数と例を示す。表中の下段に「計61(10種)」とあるのは、書き誤りのパターンが61例あり、書き誤りの種類が10種類あったことを示す。

もっとも多い書き誤りは、右の部分を書き誤ったもので61例であった。続いて下の部分が48例、左の部分が40例、上の部分が39例であった。構え・垂れなどの囲いの中の部品(以下、内(うち)と呼ぶ)の書き誤りは23例、構え・垂れなどの囲い(以下、外(そと)と呼ぶ)の部分の書き誤りは3例見られた。

字形が左右に分けられるパターン(■)では、左の部分に書き誤りが多く、上下に分けられるパターン(■または■)では、上または下の部分のいずれかだけに書き誤りがみられる場合が多かった。

4-1-3 「(c) 部品の配置の誤り」による書き誤りについて

部品の配置の書き誤りは6例であった。左右の位置が逆のものは呖(知)、臍(朝)、丁(町)の3例、点の位置が異なるものは術(術)、付(付)の2例、左・右上・右下(田)という構造が、上左・上右・下(田)になったものは喋(喋)の1例であった。

表8 分類(8)の下位分類(d)部品の付加・脱落のデータ数と例

	数	例
付加	7	漢(英) 兎(兄) 後(後)
脱落	40	哥(歌) 冢(家) 覓(覚)

表9 分類(8)の下位分類(e)「(a)から(e)の二つ以上の組み合わせ」の例

例	要素	例	要素
独(独)	1画多い 付加	懣(熱)	1画多い 異部品
深(探)	1画多い 異部品	寔(覚)	1画少ない 異部品
遺(遺)	1画少ない 異部品	覓(質)	1画少ない 異部品

4-1-4 「(d) 部品の付加または脱落」による書き誤りについて

部品が付加された書き誤りは7例、部品が脱落した書き誤りは40例であった(表8)。

4-1-5 (e)「(a)から(d)の二つ以上の組み合わせ」による書き誤り

分類(e)は、1字に2つ以上の書き誤りの要因をもつものである。例えば「前(前)」という書き誤りは、「異なる部品の使用」と「1画少ない」という2つの要因をもつ書き誤りである。

このような書き誤りは51例あった。書き誤りの要因が2つのものは48例で、3つのものは3例であった。含まれていた書き誤りの要因は、「1画多いまたは少ない」が38例ともっとも多く、続いて「異なる部品の使用」が24例、「部品の付加・脱落」が9例であった。

4-1-6 (f) その他

Hatta et al (1997)の分類を用いた本調査では、「その他」に分けられる書き誤りが119例あり、下位分類(c)(d)(e)以上にデータ数が多かった。また、下位分類(a)から(d)以外の書き誤りのパターンがみられたので、大北(2001)の分類を参考に「(f)その他」の分類を試みたところ、表10のように分けられた。

表10 下位分類(f)「その他」の分類とデータ数

下位分類	数
(1) 向きが違う書き誤り	19
(2) 突き出るか突き出ないかの書き誤り	25
(3) 線の長短の書き誤り	3
(4) 部品の分解に関する書き誤り	39
(5) 非部品の利用	33

表 11 下位分類 (4) 「部品の分解に関する書き誤り」の下位分類とデータ数および例

下位分類	数	例
(ア) 分解しないところで分解した書き誤り	26	色(色) 単(単) 悪(悪)
(イ) 分解するところで分解しなかった書き誤り	3	序(存) 歌(歌) 懸(懸)
(ウ) 3 枝線	10	不(不) 家(家) 作(作)

(1) 向きが違う書き誤り

「向きが違う書き誤り」をさらに「点の向き」「線の向き」「部品または全体の向き」の3つに分けた。点の向きが違う書き誤りは話(話), 食(食), 活(活)など5例, 線は私(私), 庭(庭), 使(使)など7例, 部品または全体は形(形), 当(当), 々(々)など7例見られた。

(2) 突き出るか突き出ないかの書き誤り

突き出るところが突き出していない書き誤りは実(実), 使(使), 解(解)など14例, 突き出ないところが突き出ている書き誤りは知(知), 病(病), 便(便)など11例あった。

(3) 線の長短の書き誤り

線の長短の書き誤りは, 金(金) 健(健), 座(座)の3例であった。

(4) 部品の分解に関する書き誤り

部品の分解に関して, 「(ア)分解しないところで分解した書き誤り」「(イ)分解するところで分解しなかった書き誤り」「(ウ)3枝点」の3つに分類した。表11にデータ数と例を示す。(ア)は「換(換)」の右下の部分のように, 本来分けなくてもよい部分を「四」と「大」に分解した書き誤りである。「支」「技」「難」「離」「遣」といった漢字の, 部品への分け方には注意が必要だろう。(イ)は「歌(歌)」の左上の部品のように, 本来なら2画に分けて書くところを, 分解せずに1画で書いた書き誤りである。

(ウ)の「枝点」とは, 渡辺(1976)の定義した用語で, 漢字を図形として見たとき, 線と線が交わる点から何本の枝が出ているかを示すものである。たとえば「丁」は, 3枝点をもち, 「十」は4枝点をもつと考える。つまり, 「3枝点」とは3本の枝線が出ている点のことである。「不」に2つ, 「家」「象」の下の部分に4つ, 「作」の右の部分に4つある。

(5) 非部品の利用

「非部品」とは, 学習者が独自に作った部品, あるいは文字で, 「書き誤った部分が漢字を構成する部品ではないもの」あるいは「書き誤った漢字が漢字ではないもの」とする。例をあげると, 「族(族)」の左の部分, 「費(費)」の上の部分, 「氏(母)」のような書き誤りである。このような非部品が含まれる書き誤りは33例あった。

5. 考察と漢字指導の際の留意点

分類(8)の書き誤りのなかで、もっとも多かったのは「(b)異なる部品の使用」であった。特に、左右の部品に分けられる漢字の右側の部品に書き誤りが多かった。さらにその右側を上下に分けたときの下の部品の書き誤りが、右側全体の部品の書き誤りと同数程度であった。

伊藤(2006)は「非漢字圏学習者は漢字全体の形態から記憶しやすい部分を切り取り、その部分に他の形を継ぎ足すというような漢字の記憶方略を用いている」と述べている。「(b)異なる部品の使用」による書き誤りの中で、部品に書き誤りが多くみられたのは、「記憶しやすい部分」プラス「継ぎ足し」の「継ぎ足し」の部分の書き誤りであると言えよう。

したがって、指導の際には部品の細かいところにも目を配る必要があるだろう。例えば、「終」の右上の小部品と「後」の右下の小部品は同じ形であるが、「授」の右下の部品とは異なる、というような部品の異同も指導する必要があると考えられる。

分類(8)で次に多かったのは「(a)1画多いまたは少ない」書き誤りであった。Hatta et al(1997, 1998), 大北(2001)の調査の結果からも、非漢字圏日本語学習者に共通して見られる漢字の書き誤りと言えるだろう。本調査の結果から横線が1画少ない書き誤りがもっとも多く、次いで点画が1画少ない書き誤りが多いことがわかった。

漢字を部品に分解し、共通の部品を利用して記憶の強化を図るのは、漢字を効率よく覚えるために有効な方法ある。しかし、「口」と「日」、「日」と「目」のように、共通の部品の内部に横線があと1画必要かどうかといった細部に注意を払わずに覚えると、有効な方法も負に作用する恐れがある。

一方、「(c)部品の配置の誤り」および「(d)部品の付加または脱落」に起因する書き誤りは少なかった。(c)と(d)は、全体的な漢字の形が把握できないことが書き誤りの原因だと考えられる。大北(2001)によると、全体的な形の把握は漢字学習のごく初期から始まっているという。調査対象者の日本語レベルが中級であることを考えると、中級の段階では、部品の配置や1つの漢字がいくつの部品からできているか、といったことに起因する書き誤りはあまり見られないと言えよう。

「(f)その他」の書き誤りに見られるような、部品の分解、線の向き、突き出る・突き出ない、非部品の利用といった書き誤りは、読み手に元の漢字を推測させるという負担を与えるものの、書き言葉によるコミュニケーションが成立しないほど重大な書き誤りではないだろう。しかし、正確な形とは言えないので指導が必要な点である。「(f)その他」の下位分類項目も、指導の際に学習者に注意を促す必要があるポイントだろう。

3枝点の書き誤りは、「不・家・象・作」の4文字で10通りの書き誤りが見られた。「家」や「作」は初級で学習する漢字とはいえ、3枝点が近くに3つないし4つあるため、学習者にとっ

て正確に書くのは難しいと思われる。書き誤りが化石化しないように、教師は学習者に注意を促す必要があるだろう。

6. まとめと今後の課題

本調査の対象となった学習者は、分類(8)の下位分類(c)「部品の配置の誤り」および(d)「部品の付加または脱落」に起因する書き誤りが少なかったことから、漢字の主な図形・構造、部品の位置はすでに習得していると思われる。そして、分類(8)の下位分類(b)「異なる部品の使用」及び(a)「1画多いまたは少ない」書き誤りが多いことから、部品の細部に注意を払う必要がある段階である、ということができるだろう。

大北(2001)は「漢字の学習過程は全体的構造から部品の細部の習得と進むと仮説をたてることができる」と述べている。しかし、「部品の細部の習得」とは、どのようなことかは具体的に述べられていない。本調査の結果から考えると、「部品の細部の取得」とは、『記憶しやすい部分』プラス『継ぎ足し』の「継ぎ足し」の部品を、形の似ている部品と間違えないように正確に覚えることであると言えよう。また、学習者に「1画多いかあるいは少ないか」が、正確な形の漢字となるかどうかの分かれ目であること指導し、漢字の細部を覚えるときの留意点として指導する必要があるだろう。

しかし、学習する漢字が多くなるにつれ、似ている漢字が増え、共通の部品をもつ漢字も増えていく。教師は、混同しやすい部品の書き誤りがないかどうか、継続的な指導が必要である。

今回の調査は、1つの国の1つの教育機関で調査した結果であるため、直ちに一般化することはできない。非漢字圏の他の国、あるいは他の教育機関の日本語学習者の書き誤りのデータも比較・検討する必要がある。また、調査を継続的に行い、どの書き誤りの要因がいつごろから見られ、いつごろから見られなくなるか、といった縦断的なデータの収集も必要であろう。今後の課題としたい。

参考資料1：Hatta et al (1997) の分類の英語表記を以下に示す。

- (1) substitution of Kanji with a similar sound or phonology (*P* type)
- (2) substitution of a configurationally and morphographically similar Kanji (*M* type)
- (3) substitution of a semantically similar Kanji (*S* type)
- (4) mix of *P* and *M* types (*P+M* type)
- (5) mix of *P* and *S* types (*P+S* type)
- (6) mix of *M* and *S* types (*M+S* type)
- (7) mix *P*, *M*, and *S* types (*P+M+S* type)

- (8) substitution of non-Kanji (NK type)
- (9) placement-order error (Or type)
- (10) others (Oth type)

参考資料 2: Hatta et al (1997) の分類(8)の下位分類の英語表記を以下に示す.

- (a) One or Two Stroke Addition or Omission
- (b) Misuse of Segment
- (c) Dislocation or Omission of Segment
- (d) Addition or Omission of Segment
- (e) Combination of More Than Two Types

参考資料 3: 大北 (2001) の分類は以下のとおりである.

分類	下位分類
音	音 音+形
形	旧字体または簡体字 図形
意味	(下位分類なし)

参考資料 4: 大北 (2001) の分類の「図形」の下位分類は以下のとおりである.

(a) 異なる部首	(i) 1画が2画に分解
(b) 余分な部首	(j) 2画が1画に融合
(c) 部首がない	(k) 異なる組み合わせ
(d) 間違った部首の形	(l) 異なる部品
(e) つきでる・でない	(m) 崩壊・融合
(f) はねる・はねない	(n) バランスが悪い
(g) 1/2画多い少ない	(o) 異なる漢字
(h) 1画が短い・長い	(p) 左右逆
(i) 1画が2画に分解	(q) 不明

参考文献

伊藤寛子 (2002) 『非漢字圏日本語学習者の漢字の記憶検索過程に関する研究』東北大学情報科学研究科修士学位論文

—— (2006) 『日本語学習者の漢字の記憶検索過程に関する研究』東北大学情報科学研究科修士学位論文

- 大北葉子 (2001) 「漢字の書き誤りが漢字教育に示唆すること」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』国立国語研究所, p. 19-28.
- 川口義一・加納千恵子・酒井順子編著 (1995) 『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創宅社
- 拓殖大学留学生別科日本語研修センター (2002) 『ひらけ日本語文型練習帳・漢字学習帳 (上・下)』凡人社
- 西口光一・河野玉姫 (1994) Kanji in context reference book *The Japan Times*.
- 渡辺 茂 (1976) 『漢字と図形』日本放送出版協会
- Hatta, Takashi., Kawakami, Ayako. (1997) Kanji writing errors in Japanese college students and American Japanese students *Cognitive Processing of Chinese and Related Asian Languages*. The Chinese university press, 401-416.
- Hatta, Takashi., Kawakami, Ayako., Tamaoka, Katsuo. (1998) Writing errors in Japanese Kanji: A study with Japanese students and foreign learners of Japanese. *Cognitive Processing of Chinese and the Japanese Languages*. Kluwer Academic Publishers, 303-316.